

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 江戸の祭：天下祭と天王祭

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大東, 敬明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002334">https://doi.org/10.57529/00002334</a>

# 江戸の祭 — 天下祭と天王祭 —

大東敬明

学術資料センター（神道資料館部門）は、平成二十七年、「江戸の祭」についても研究を行った。

本部門は、國學院大學院友神職会東京支部の寄附金により『東都歳事記』電子版（神社特集）

（[http://www2.kokugakuin.ac.jp/kaihatsu/t/e\\_index.html](http://www2.kokugakuin.ac.jp/kaihatsu/t/e_index.html)）を公開している。また、平成二十六

年度からは、研究事業「祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析」を進めている。

江戸の祭りについての研究は、これらに関連したものであり、『東都歳事記』を読み解きながら、國學院大學が所蔵する資料を活用した祭祀・祭礼研究を行うとするものである。

本研究の成果は、國學院大學博物館における特集展示「番附にみる天下祭」（平成二十七年五月二日～五月二十四日）及び、同「夏の祭—祇園祭と天王祭—」（同七月十一日～八月三十日）の一部として公開した。

「番附にみる天下祭」では天下祭（日枝神社・山王祭、神田神社・神田祭）を、「夏の祭」では『東都歳事記』にみえる江戸の天王祭を扱った。

本稿では、両特集展示の報告を兼ねて、本部門の研究成果を記す。この調査・研究は、吉永博彰

（ポスドク研究員）、木村大樹、富田谷桃子（ともに臨時雇員）及び筆者が行った。

## 一、天下祭と祭礼番附

「番附にみる天下祭」においては、國學院大學図書館直一コレクション所蔵及び、本部門が調査・研究を進めている天下祭に関わる祭礼番附を展示した。祭礼番附は祭礼のたびごとに絵草紙屋などが出版したパンフレットのことである。

展示資料は次のとおりである。

『神田御祭礼番附』（文政十二年、同（天保四年）《以上、一枚摺型》、『山王御祭礼御免番附』（天保七年）、『神田御祭礼附祭番附』（天保八年）、『山王御祭礼御免番附』（天保九年）、同（天保十一年）、同（天保十三年）《以上、絵本型》、『神田明神御祭礼番附』（安政六年）《一枚摺型》ほか。

「天下祭」とは、江戸山王権現（現在の赤坂・日枝神社）の山王祭（旧暦六月十五日）、神田明神（現在の神田神社）の神田祭（旧暦九月十五日）のこと、天和元年（一六八一）以降、両祭礼は隔年で行われた。なお、神田祭は明治二十五年（一八九二）に神幸祭の執行日を現在と同じ五月として以後、

五月に行っている。

江戸時代、両祭礼では、神輿の行列に関わる費用を幕府が負担し、また大伝馬町・南伝馬町が公的に祭礼行列に奉仕した。さらに、祭礼行列が江戸城内に入り、将軍が上覧することもあった。山王祭・神田祭が「天下祭」と称されるのは、このためである。

両祭礼の行列は、神輿（山王は三基、神田は二基）の行列を中心として、産子町の人びとが出す「出し」、当番町の附祭、警固などから構成された。

「出し」は各町のシンボルともいえ、両祭礼ともに大伝馬町の鶏・諫鼓（太鼓）、南伝馬町の猿を



『山王御祭礼番附』（万延元年）



『神田明神御祭禮番附』(安政6年)

はじめ、それぞれの町々が趣向をこらした人形や造り物を出している。附祭では、昔話、年中行事ほかの様々な事柄をテーマとして、仮装行列や踊りが行われ、さらに象・酒呑童子の首といった大がかりな造り物などが出されることもあった。

また、行列には幕府の経費負担によって独楽回しや太神楽なども出されることもあり(御雇祭)、附祭とともに人びとの楽しみとなっていた。

祭礼において、各町はその年の趣向が決まると、どのような出し物を出すのかなどを、町奉行所に提出した。この際、摺物として提出することが求められ、これの印刷は絵草紙屋が行った。先述したように絵草紙屋は、祭礼番附の印刷、販売も行っており、彼らが祭礼前に番附を知ることができたのは、このためである。

天下祭の行列は、山車や仮装行列などが加わる華やかなものであったので、数多くの見物人で賑わった。祭礼番附は、見物の人々のためのパンフレットの機能も持っていた。亀川泰照は「祭礼番附と江戸地本問屋 森屋治兵衛」において番附を一枚摺型、絵本型、横帳型に分類する。

出版された多くの祭礼番附は、絵と文字とで行列を紹介しており、当時の祭礼の雰囲気やうかがうことができる。しかし、祭礼前に出版されるため、その年の様子を観て描いたものではない点に注意する必要がある。

今回、展示した版本のうち、すべての資料の版元は馬喰町・森屋治兵衛である。森屋治兵衛は、

江戸の絵草紙屋であり、多くの祭礼番附の出版を手がけた。さらに文政〜天保期の一時期、祭礼番附を独占していた。

## 二、江戸の天王祭礼

毎年七月に京都で行われる祇園祭(八坂神社)は全国的に広く知られており、全国各地でも、それぞれの地名を冠した祇園祭が行われている。

また、愛知県・津島神社では七月に尾張津島天王祭が行われ、東京でも六月にいくつもの神社で天王祭が行われる。これらの神社は、江戸時代以前は牛頭天王信仰と関わる場合も多く、この「天王さま」は疫病除けの神であった。

特集展示「夏の祭」においては、八坂神社・祇園祭、津島神社・天王祭、江戸の天王祭をとりあげた。



南伝馬町 祇園会旅所(『江戸名所図会』巻1)

ここでいう江戸の天王祭とは、神田社地天王祭礼(一、二、三の宮)(神田神社撰社江戸神社、大伝馬町八雲神社、小舟町八雲神社)、品川天王祭礼(荏原神社・品川神社相殿)、四谷天王稲荷祭礼(須賀神社)、浅草蔵前牛頭天王祭礼(浅草須賀神社)、橋場牛頭天王祭礼(石浜神社撰社江戸神社)、小柄原牛頭天王祭礼(素盞雄神社)のことである。これに関わる資料として、『東都歳事記』『江戸名所図会』『日本橋魚がし旧天王祭団扇投之図』を展示した。

とりわけ、神田明神社地の天王祭礼(一の宮・南伝馬町、二の宮・大伝馬町、三の宮・小舟町)については、『東都歳事記』を読み解きながら、そこに記されたそれぞれの神輿の巡幸路や、産子の町々を切絵図上で把握した。この三社の産子町の分布は、図(神田社地天王社産子町分布図(案))のとおりである。同図は『東都歳事記』『続御府内備考』(『東京神社史料』五 所収)に挙げられている町々を、「東京実測図」(内務省地理局、一八八八年)に示したものをベースとしている。

産子の町々は、御旅所(仮屋)が設けられた南伝馬町(一の宮)、大伝馬町(二の宮)、小舟町(古くは小伝馬町)(三の宮)を中心に、現在の神田駅周辺から銀座にかけての地域に分布している。祭礼においては、この地域を神輿が隈なく練っている。神田祭においては、本社の神輿は天王祭のように隈なく練っておらず、この点に違いがある。

天王一の宮の祭礼は、六月七日から十四日かけ

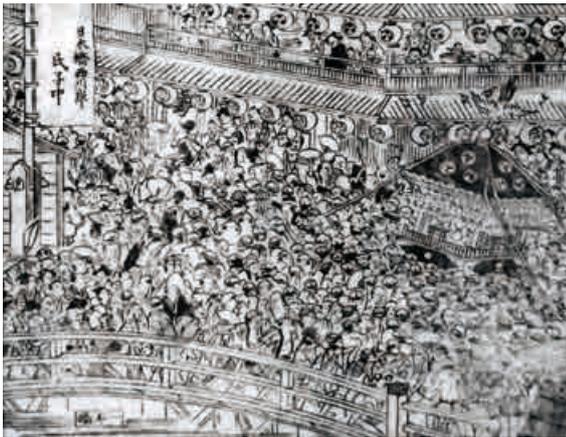
て行なわれた。神輿渡御においては、七日、神輿は神田明神を出ると、筋違橋御門に入り、須田町ほかの町々(現在の神田駅・日本橋周辺)を抜け、常盤橋御門より江戸城内に入り、大手御橋上に神輿を据えて奉幣が行なわれる。その後、北町奉行所・南町奉行所の玄関口でも奉幣が行なわれ、呉服橋御門(現在の東京駅・新日本橋口あたり)より出て、現在の八重洲・日本橋・京橋あたりの町々をめぐる、京橋の上に神輿を据えて神酒が捧げられる。その後、南伝馬町二丁目の仮屋(御旅所)に入る。十四日は仮屋から京橋へ行き、引き返して、日暮れ頃、神田明神へ戻った。ただし、山王祭が

行われる年は、早朝に戻った。山王祭は六月十五日に行なわれ、その前日も出しや練り物が江戸山王権現の産子町をねり歩いている。南伝馬町をはじめ、近隣の町々は山王祭に練り物などを出しており、早朝に帰社するのは、これに関わるのであろう。

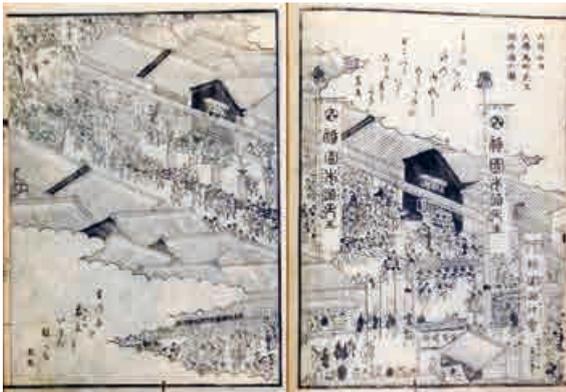
さて、『東都歳事記』には、この巡幸路のうち、神輿が呉服橋を渡り、左手に一石橋を見ている場面が描かれる。また、『江戸名所図会』には、南伝馬町天王の仮屋(大政所)の様子が描かれている(二三頁)。この絵には、四神鉾、神輿を早く人々、それを囃す人々、見物する人々が描かれている。



神田社地天王社産子町分布図(案)(富田谷桃子・作図)



神田社地天王一の宮(『東都歳事記』巻2 夏)



神田社地天王二の宮(『東都歳事記』巻2 夏)



春高年昌「日本橋 魚がし旧天王祭団扇投之図」(明治22年)

『東都歳事記』に依拠すると、神田社地天王祭礼の神輿渡御の行列は、幟・太鼓・神・祭鉦・四神鉦・太鼓・獅子頭・幣・小太鼓・神輿・神几・騎馬の社務である。ただし、一の宮の四神鉦は南伝馬町に置かれ、行列には加わらない。

天王祭礼の行列は、『東都歳事記』天王二の宮の祭礼に描かれている。鉦や獅子が含まれることは『年中行事絵巻』に描かれる祇園御霊会や稲荷祭とも共通している(岡田莊司「御旅所祭祀」)。

天王三の宮の神輿渡御では、日本橋にあった魚河岸を通る際に、棧敷から魚問屋の人々が団扇を投げる風習があった。「日本橋 魚がし旧天王祭団扇投之図」は、この様子を描いている。

天王祭においては神輿渡御が重視されており、

現在の東京における神輿祭りの原型となっていると言える。

【参考文献】

- ・ 亀川泰照「祭礼番附と江戸地本問屋 森屋治兵衛」(江戸東京近郊地域史研究会編『地域史 江戸東京』岩田書院、二〇〇八年)
- ・ 岸川雅範「江戸・東京の祭礼文化―江戸天王祭を中心に―」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊五二号、二〇一五年)
- ・ 木下直之・福原敏男編『鬼がゆく 江戸の華・神田祭』(平凡社、二〇〇九年)
- ・ 竹ノ内雅人「江戸の神社とその周辺―祭礼をめぐる―」(『年報 都市史研究』一二、二〇〇四年)

- ・ 都市と祭礼研究会編『神田明神選書1 天下祭読本 幕末の神田明神祭礼を読み解く』(雄山閣、二〇〇七年)
- ・ 吉原健一郎「江戸天王祭覚書」(『日本常民文化紀要』二二、二〇〇〇年)